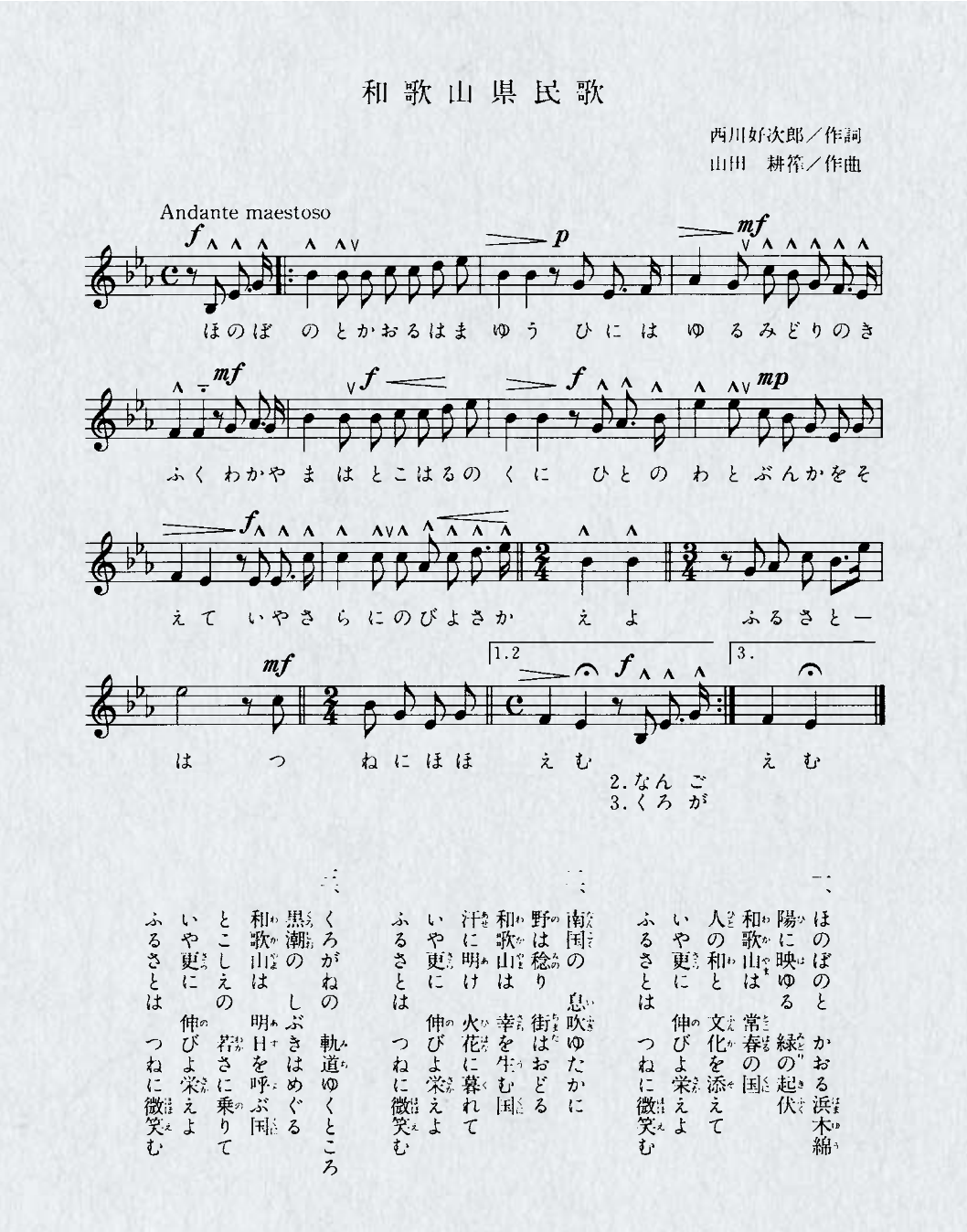

和歌山県民歌の誕生

和歌山県民歌は昭和23年に誕生しました。戦後まもない社会の混乱が落ち着かない中、後世に残るものを何か考えてほしいと篤志家の資金付きの依頼があり、和歌山フィルハーモニック・ソサイエティ委員長の竹中重雄さんが企画し、佐藤春夫さんが作詞部門の選者、山田耕筰さんが作曲部門の選者となり公募を行いました。当時の新聞には当選賞金1万円と記されています。同新聞の広告欄の大売り出しには、学習机840円、学童帽子60円等々とあり、食べるにこと欠くこの時代に、よくぞこのような計画がなされたものです。やはりふるさとを愛する精神が強く、和歌山再建の熱意に燃えていたからでしょう。

応募の結果、昭和51年に和歌山県文化功労賞を受賞された西川好次郎（よしじろう）さんの詞が選ばれましたが、作曲部門はどの作品も選ばれなかったため、山田耕筰さんご自身が作曲を行い、完成にいたりました。

佐藤春夫氏　（昭和23年4月18日　毎日新聞）

思ったより水準が高く情緒豊かに明朗で県民性がよく現れているのに興味を感じた。ある県でも県民歌の選をしたが理屈っぽく、なんとなくあきたりなかったが、この県民歌は面白く感じた。当選作は、たいそういきとどいた作と思ったら西川氏は、度々全国的なこの種のものに当選しているのだそうだ。

西川好次郎氏（昭和23年4月18日　毎日新聞）

南国紀州を愛する熱情を傾けて作詞した。真に胸底から湧き上がる平和へ、勤労へ、希望へ真心に燃えての作です。郷土くまなく歌声の澄み流れることを望んでやまない。

（以上昭和54年制作の和歌山県民歌のレコードカード抜粋）